

第一話 宵のはじめに

一

四月のある朝。スズメたちが朝の気たるさをつつくように鳴いている。

山野実波(やまのみなみ)は、台所の椅子に座ってトーストを食べていた。アパートの二階。窓の外には、昨日の雨で少し散ってしまった桜が見える。入社したばかりのころ、あの桜を見ながら緊張したことを覚えている。あれから四年。

向かいの椅子には母親が座ってスマホを見ている。ピンク色のテカテカのマニキュアを塗った爪を画面にゴツゴツ言わせながら、画面をせわしくスクロールしていた。

実波はずっと母親のことをママと呼んでいる。小さいころからそうだった。一度だけ『お母さん』と呼んだことがあった。小学校の高学年のころだったと思う。友達がそう呼んでいるのを聞いて、なんとなく真似してみた。そうしたら母親がなんかむずがゆいからママって呼んで」と言った。笑いながら、照れた様な顔をしていた。それからずっとママだ。

二人きりで生きてきたから、なのかもしれない。父親は実波が幼いころに死んだ。だから実波にとって、家族という言葉はずっとこの人一人だけを指していた。

ママはノリがよくて、声が大きくて、愛情表現がいちいち大げさだった。話を聞くと、どうやら元ヤンキーのギャルで、若い時はだいぶヤンチャしていたらしい。今はドラッグストアでパートをしているが、たまにその時代の気配が顔を出すことがある。

例えば実波が小学生のころの話。実波が同級生からちよつとしたことではじめられそうになったとき、学校の職員室に怒鳴り込んだことがあった。実波はそのとき恥ずかしかったのか嬉しかったのか、今でもよくわからない。たぶん両方だった。

ママは実波によくハグをする。買物物の帰り道に。夕食の後に。寝る前に。理由もなく。ママもお父さんがいなくて寂しいんだろうなって小さいころから思ってたから、実波も少し照れながら応じる。嫌いではなかった。むしろ、そうやって誰かの体温を身体で感じるのが好きだった。

ただそれを、誰かに話したことはなかった。

みなみ、今日早いの？」

ママが冷蔵庫を開けながら聞いた。

「いつも通りだよ」

「ふーん」

それだけだった。ママはオレンジジュースをコップに注いで、さっきまで正面にいたのに、わざわざ実波の隣に座ってきた。テレビがついている。朝のニュース番組。誰かが何かを言っている。

実波はトーストを半分食べたところで、ふと手を止めた。別に何も考えていなかった。ただ、窓の外の桜を見ていた。

ぼーっとしてる」と実波の目を見ながらママが言った。

「じゃないよ」

「してる。恋でもしてんの」

「じゃないって」

「ほんとかー？」

実波の脂肪で膨らんだ柔らかい脇腹を突つきながらママが笑った。実波も少し笑った。

恋。

その言葉が、頭の中でしばらく残った。

実波の一日は、たいてい同じだった。電車に乗って、会社に着いて、パソコンを開いて、仕事をして、電車に乗って、帰ってくる。それだけだった。四年目になって、やっとそのリズムが体に馴染んできた。最初の三年は、同じことをするのにいちいち時間がかかった。先輩に確認してばかりで、同期が要領よくこなしているのを横目に、一人でいつまでも同じミスを繰り返していた。

今はそうでもない。と思う。ただ、楽しいかと聞かれると、よくわからなかった。たいていの仕事は楽しいものではないとはわかっているけど。嫌いではない。でも楽しいとも違う。そういう仕事だった。

食品飲料メーカーの一般事務。新しい商品が出るたびにサンプルが回ってくる。それが実波にとって、この仕事をしているときのちょっとした楽しみだった。

二

ある日、出会い系のアプリを開いた。

四月の終わり、水曜日の夜。ママはもう寝ていた。実波は自分の部屋でゲームをしていたが、なんとなく飽きて、スマホを手にとった。SNSを流し見して、Youtube

を少し見て、それからなんとなく、アプリのアイコンをタップした。ずいぶん久しぶりだった。

一六九センチ、一〇二キロ。それがプロフィール欄に書かれた実波の身長と体重だった。今は二キロ増えたことを思い出して、体重を一〇四キロに直した。

社会人になってからは、ほとんどアプリを開いていなかった。大学生のころは何度か使って、何人かと会った。でも社会人になってから、気持ちに余裕がなかったからか、なんとなく億劫で、一回も触っていなかった。

久しぶりに見る自分の自己紹介欄。

鍛えてる人がタイプです。脂肪はあっても気にしません。大きい人、お父さんやお兄ちゃんみたいな人が好きです。自分はただの駄デブです。」

フィルターの設定は体重九〇キロ以上、身長一七〇センチ以上。近くににいる人たちのプロフィール写真を流した。前見た時と顔ぶれがずいぶん変わった気がした。

何人か見送って、ある写真で止まった。ジムの鏡で撮ったであろう、筋肉があつて脂肪もある身体を写した写真。顔は写真の外にはみ出ている見えなかった。タップしてその人のプロフィールページに飛んだ。あげられている写真はどれも顔は見えなかった。でも雰囲気で自分のタイプだと感じた。

プロフィール文を読んだ。

エーキ。二十七歳。品川勤務。仕事終わりや週末に飲める人、ぜひ友達になりましょうー」

短い自己紹介だったが、変な地雷臭もしない。

実波はしばらく画面を見ていた。いいねを押すのを、少し迷った。迷う理由は特になかったけど、久しぶりだったからなんとなく手が止まった。

一分ほど考えて、押した。すぐにスマホを伏せて、また天井を見た。どうせ反応はないかもしれない。

視界の端に、棚に飾つてある数少ない家族三人が映る写真が見えた。実波はまだ真ん丸の赤ん坊だった。父親に抱きかかえられていて、ママがそれに寄り添っている。

でも、と思いながら、実波は“エーキ”のプロフィール画像からはみ出て見えなかった部分に、写真の父親の顔を重ねていた。

宵のはじめ。

目をつむり、そんなことを想像しながら無意識にパンツの中に手を入れていた。

翌朝、アプリの通知が来ていた。“ユーキ”からいいねのリアクションとメッセージがあった。

実波はしばらく画面を見た。アプリの中では「ミツチャン」という名前を使っていた。大学のころから変えていなかった。本名をそのまま使うのが少し恥ずかしかったから。

メッセージを開いた。

「こんにちはー！いいねありがとうございますー！ユーキといいます。仲良くしてもらえると嬉しいですー！」

定型文のようなメッセージだった。

実波は少し迷ってから返した。

「ミツチャンです。こちらこそ仲良くしていただけると嬉しいですー！ぜひよろしくお願いします」

仕事に行く準備をしながら打ったから、図らずもこちらも定型文のような返しになってしまった。

返信はすぐにきた。

「よろしくですー！ミツチャンって、本名からとったあだ名ですか？」

実波は少し止まった。

「そうです」と打った。本名は少し変わった名前なんで

「気になりますねー！いつか教えてくださいー！」

それだけだった。無理に聞いてこなかった。コミュニケーションはきちんととれる人な感じがした。“ー”を多用してるところを見るに、きっと体育会系なんだろうな、と実波はなんとなく思った。

それから数回、メッセージが続いた。

“ユーキ”は返信が早かった。実波が少し天然な返しをしても、うまく拾ってくれた。

「神奈川ってどのあたりですか」

「横浜の方です」

「じゃあ横浜で飲みませんか。今週末、もし予定がなければ」

実波は少し迷った。

「アプリで知り合った人と実際に会うのは久しぶりだった。

大丈夫です。飲みましょう」と打った。

送信してから、「せひー！」とか「早く会いたいですー！」とか元氣そうな感じで送ればよかったかなとか考えながら、少し心臓の鼓動が早まるのを感じた。

具体的な時間と場所は後日また連絡するとのことで、やり取りはひとまず終わった。

実波は玄関でスーツのポケットにスマホをしまい、「いつてきます」と、すでに誰もいない家に向かって言うてから外に出てた。

四

土曜日の夕方。

宵のはじめ。

まだ少し明るくて、昼の水色と夕焼けの赤色と夜の紺色が混ざったような空。街の光が滲んで、通りを歩く人たちの輪郭をぼやけさせていた。

久しぶりの初リアル。少し人見知りの実波は、今朝からずっと緊張していた。待ち合わせ場所には電車で向かった。吊革をつかみ窓に反射する自分の顔を見た。いつもより不細工に見えて、口元だけ笑顔を作ってみた。なんだか余計に変な顔になった気がした。

待ち合わせ場所の桜木町駅の改札に着くと、そこにはすでに“ユーキ”らしき男が立っていた。

大きい。最初に思ったのはそれだった。写真よりも大きい気がした。一七四センチ、と聞いていたが、体の厚みもあってそれ以上に見えた。肩幅があつて、腹が少し出ていて、背筋が伸びていた。サイドを刈り上げた短髪で爽やかな印象を受けた。

まだ四月だというのに白い半そでのシャツを着ていた。

実波が近づくと、その男が顔を上げた。

「ミッちゃんさんですか？」

はい。ユーキさんですか？」

そうです！よろしくお願いします！」

また定型文みたいな初対面の会話だな、と実波は思った。

ただ、“ユーキ”はずっと笑顔だった。人を安心させる種類の笑顔だった。なんだか懐かしいような感じもして、会つてよかったかも、とすでに実波は思い始めていた。

ピン、ポーンという間延びしたような音が背後の改札で鳴っていた。



五

駅から歩いて数分のところにある居酒屋に入って、向かい合って座った。

改めて自己紹介みたいな感じで会話が始まった。“ユーキ”の本名が井領勇樹(いりょう ゆうき)だということ、横浜には友達に会いに時々来ていること、職場のある品川に住んでいること、不動産関係の仕事をしていることなど、勇樹は初対面の人間に個人的なことを話すのにあまり抵抗を感じていないようだった。

実波も自分について少し話したが、本名は伝えなかった。勇樹は特段気にした様子も見せず、ずっと「ミツチャンさん」と呼んでくれていた。

話題を切り出すのはほとんど勇樹だった。仕事の話、横浜の話、好きな食べ物の話。話題が尽きなかった。でも一方的ではなかった。実波の話もちゃんと聞いた。

食品メーカーって、働いてるとサンプルとかもらえたりするんですか」

もらえます。それが仕事してて一番楽しみで」

正直でいいですね」勇樹が笑った。

思わず実波も笑った。自分でも少し驚いた。久しぶりに、楽しいと感じていた。今のところ、何を聞かれても当たり障りのない受け答えしかしていない気もして少し不安になっていたが、勇樹がずっと笑顔だったから、いつの間にかそんなことも思わなくなっていた。

話題は料理の話に移った。実波が料理をすること、食べることが好きだということと話した。

何作るのが得意なんですか」と勇樹が聞いた。

煮物とか。手間が少しかかるけど地味なやつです」

「いいね。渋い」

片手をヒストルみたいな形にして実波に向け、ウィンク(タイミング的にそれがウィンクだろうと実波は思った)しながら勇樹は言った。

「ありがとうございます」

俺、煮物好きなんですよね」

実波はその言葉を、胸の中にしておこうと思った。

六

気づけば三時間も居酒屋で話していた。お互いにお酒もご飯も入らなくなっていた。

明日は日曜日。二人とも特に予定はなかったし、早く寝なくてはいけない理由もなかった。勇樹が酔った顔で、寂しいから家にきて一緒に寝てほしい」と言った。言い方がストレートすぎて、あと、そう言ったときの勇樹の顔が本当に寂しそうだったから、別に変な意味は無いんだろうなと実波は思った。もちろんそういう行為に及ぶ流れになっても別に構わなかったから、品川にある勇樹の家についていくことにした。

勇樹の部屋は、整理されている印象だった。でも生活感があつた。筋トレの器具が部屋の隅にあつて、本棚に仕事関係の本が並んでいた。ベッドには出かける前に脱いだであろうシャツと短パンの残骸があつた。

散らかつてごめんなさい」と勇樹が言った。

全然散らかってないですよ」

「ミッちゃんさん、優しいですね」

実波は少し笑った。

勇樹が冷蔵庫から冷えたペットボトルの水を持ってきた。

「ありがとうございます」と受け取りながら、なんとなく壁に掛かっている丸時計を見た。短針の先には野球ボール、長針の先にはバスケットボールがくっついた子供っぽい時計は十一時半を指していた。

「あ、ちよつと待つてください。ママ…母親に今日帰らないこと言っておかないと。」
「ママ」と思わず口走ってしまったことを隠すように、急いでポケットからスマホを取り出してラインを開いた。

勇樹はまだ酔った顔をしながら、水を一口飲んで、

「ミッちゃんさん、お母さんのことママって呼んでるんですか？めっちゃ、かわいいー！」と言って、ハグをしてきた。

ドクンと心臓が大きく鳴った気がした。母親をママと呼んでいることが完全にばれたからではなく、勇樹にハグされたかなのは明らかだった。勇樹の体温を腕で、首で、お腹で感じた。ママのハグとはまったく違った。

「ち、違います」

我ながら演技っぽいと思える言い方で、何に違うと答えたのか自分でもよくわからないまま勇樹の身体を優しく押しやった。

ママにメッセージを送ってからは一緒に床に仰向けになって、天井を見ながらまた居酒屋の続きみたいに話した。

ふいに勇樹の手が実波の腹に触れた。

実波は少し止まって、それからその手に自分の手を重ねた。大きな手だった。温かかった。

「大丈夫ですか」と実波の方を向いて勇樹が聞いた。

「大丈夫です」

「本当に？」

「本当に」

その時、ピロンとスマホが鳴った。ママからだった。画面の通知には オッケー☆楽しんでねー」とだけ表示されていた。

実波がスマホを遠くに放り投げると、勇樹はゆっくり上体を起こして近づいてきた。首と背中に腕を回して実波を優しく抱き寄せた。

実波の心臓がまたドクンと静かに鳴った。

勇樹はタチで、実波はウケだった。でも実波は挿入する行為に特にこだわりはなかった。どちらかと言えばバニラ派だった。触れていること、キスをする事、誰かと心がつながっていること、それだけで十分だった。

勇樹の体は大きかった。抱きしめると、脂肪の下に筋肉があることがよくわかった。

勇樹の顔が近づいてきて、唇が触れた。やわらかかった。勇樹の匂いがした。お酒の匂いがした。多分自分もしてる。不快じゃなかった。

一度離れて、何かを確かめるように互いに目を合わせた。今度は同時に唇を寄せた。勇樹の手が実波の後頭部に回って強く引き寄せた。舌を激しく入れ合った。熱さと柔らかさと混ざり合いたいという意思を互いに感じた。

実波は自分の陰茎が固くなっていくのを感じた。勇樹もそうだろうか、と思いを伸ばしてズボンの上から触れてみた。

固かった。触れた瞬間、勇樹の息遣いが荒くなった。

息が混ざった。匂いが混ざった。身体も全部、混ざり合いたいと実波は思った。

腕を勇樹の背中に回して引き寄せる。広い背中だ、と思った。シャツ越しに、筋肉の張りや脂肪の柔らかさが感じられた。

唇が離れた。勇樹が実波の顔を見た。

大丈夫？」

大丈夫です」

また唇を重ねた。

しばらくそうしていた。

勇樹の手が実波のシャツの裾から入ってきた。腹に触れた。脂肪の乗った、柔らかい部分に。

あ……」と実波は一瞬止まった。

やわらかい」と勇樹が言った。

優しい言い方だった。

勇樹の手のひらが実波の腹の上をなでるようにゆっくり動いた。温かった。実波は勇樹の首に腕を回して、さらに強く引き寄せた。勇樹の唇が耳元に来た。首筋に来了。鎖骨に来了。シャツをまくり上げて、胸に来了。

あっ」

舌が乳首に触れた。

思っていたより声が出た。こらえようとしたが、だめだった。

勇樹がもう一度舌を当てた。唇でふくんで、ゆっくり吸った。

ん……っ」

感じやすいんだね」と勇樹が言った。

実波は何も言えなかった。顔が熱かった。

勇樹の舌が離れて、また触れた。なでるように。

実波は勇樹の手を強く握っていた。久しぶりに感じる感覚で、気持ちよくて、これがつつと続いてほしいと思った。

実波は自分の下着の前部が少し濡れているのを感じた。

しばらくして、勇樹の手がゆっくりと実波の下半身に向かっていった。ズボンのウエストに指がかかった。確かめるように止まった。

んっっ」

「……んっ」

勇樹の手が下着の中に入ってきた。

実波も、勇樹のズボンのウエストに恐る恐る手を伸ばした。勇樹が小さく笑った。遠慮しなくていいよ」

実波の手が下着の中に入った。

勇樹のものは大きかった。自分と比べて、という考えが頭をよぎった瞬間、勇樹の手が実波のものに触れた。

ん」と声が漏れて、実波は思わず顔をそむけた。

すごい濡れてる」

「……小さくてすみません」

実際、実波のものは太さこそ標準だったが、とにかく短かった。真性ではなかったが、竿(この表現が当てはまるほど長くはなかったが)の先まで、むしろ少し余るくらい皮がかぶっていた。もし陰毛が無ければ、幼くて未発達に見えるだろうと実波自身思っていたし、それを少し恥ずかしく感じていた。

勇樹が少し動きを止めた。

すみませんって、何が？」

だから、その……」

かわいい」と勇樹が言った。

え」

かわいいじゃん」

笑っていたが、馬鹿にしている感じではなかった。

実波はそれ以上何も言えなかった。言おうとしたけど、その前にもう一度、勇樹が実波の口をふさぐようにキスをした。心も体も勇樹に優しく抱きかかえられているような感覚になった。

勇樹の手がゆっくり動いた。実波も、恐る恐る動かした。勇樹が低く息を吐い

た。互いに吐息が漏れていた。

しばらくそうしていた。互いの手が、互いの陰茎をゆっくり刺激していた。

やがて勇樹が身体を起こして、実波のズボンに手をかけた。

「いっ？」

「……はい」

ズボンと下着が下ろされ、完全に足から抜き取られた。されるがままに、赤ん坊のように仰向けで、肘をまげてバンザイをしたような状態で。

実波は思わず目を閉じた。

勇樹は何も言わなかった。唇が、シャツがめくれてあらわになっている腹に触れた。

「あ」

唇が太ももに触れた。それからゆっくり、実波の陰部に向かっていった。

勇樹は実波のつぼみのような陰茎を優しく口に含んだ。

実波の手が勇樹の人差し指だけをぎゅっと握った。

勇樹の口の中は温かった。勇樹の頭が上下するたびに「ああ」と声が漏れた。こ
らえようとしたが、こらえられなかった。

ふいに勇樹が顔を上げた。可愛いわが子を見るような顔をしていた。

声もかわいい」

顔が熱くなる。

言わないでください」

勇樹がふっと笑った。それからまた実波の陰茎を口に含んだ。

しばらくして、実波は勇樹の肩を持って身体を引き寄せた。

「……僕も、したい」

勇樹が少し驚いたような顔をした。それから笑った。

「いよ」

体の位置を入れ替えた。

全部脱いで」と勇樹が言った。

「うん」と答えて、実波はシャツを脱いだ。

脂肪のついた柔らかそうな身体があらわになる。実波は幼いころから肥満体型だ
ったためか、バランスよく全身に脂肪がついていた。手足の短さも相まって幼さが抜
けていないような身体をしていた。

やっぱりかわいい」

勇樹が優しく言った。実波は何も言わず少しはにかんだ。

生まれたままの姿になった状態で、勇樹のズボンと下着を抜き去り、実波は恐る
恐る顔を近づけた。

勇樹のものは大きかった。自分のとは全然違う、と思った。

無理しなくていいよ」と勇樹が言った。

無理してないです」

実波は勇樹の陰茎の先っぽに唇をつけた。少し濡れていた。勇樹の息遣いが少し
荒くなった。

勇樹の手が実波の頭をつかんだ。急かすわけでも、強く押すわけでもなく、ただ
そっと乗せているだけだった。撫でているようでもあった。

実波は勇樹の大きな陰茎を、最初は半分まで口に含みゆっくりと頭を上下に動
かした。何回かそうして、少し苦しかったけど、頑張って根本まで飲み込んだ。口
の中、喉の奥までいっぱいになった。ゆっくり動かす。

勇樹の息遣いがさらに荒くなっていく。

大きくて苦しかったけど、勇樹のすべてを受け止めたいと強く思った。

しばらくして、勇樹が実波の肩を引いた。

「うち来て」

実波が顔を上げると、仰向けのまま勇樹が実波を抱き寄せた。

出しているよ」

耳元で低く言われた。

実波は少し止まった。勇樹は実波を仰向けにさせ、その陰茎をつまんだ。最初はゆっくりと、次第に速度を増して、勇樹は実波のものを刺激した。

実波の息遣いが荒くなっていった。

勇樹がもう片方の手で実波の乳首を刺激した。口に実波の耳を含んだ。息が実波の首筋に掛かる。

『……きそう……あ』

少ししかこらえられなかった。勇樹の手は止まらなかった。最後まで、丁寧に扱ってくれた。

実波は自分の膨らんだお腹で直接は見えなかったが、出した液体はすべて自分の恥丘と下腹部で受け止められているのを感じた。

動けなくなっていた実波の精液を、勇樹は近くに置いてあったティッシュで優しく拭きとってくれた。拭いた後、勇樹はまたぎゅっと実波のことを抱きしめた。

少しして、実波は低く息を吐いた。勇樹の手を強く握った。そのまま天井を見ていた。勇樹は実波を抱いたまま、耳元で聞いた。

気持ちよかった？」

「……うん、めっちゃ」

実波はそう言つて、ゆっくりと身体を起こした。仰向けの勇樹のものに再び顔を近づけた。

大きかった。改めて見ると、さっき手で触れた時に感じたものよりも大きく見えた。

本当に大きい」

思ったことがそのまま口から出た。勇樹が笑った。

そつと唇をつけた。やっぱり温かかった。

ゆっくりと動かした。半分啜えて、それから飲み込むように根元まで。

勇樹の手が実波の頭に触れた。さっきよりも苦しくなかった。

もつともつと勇樹に気持ちよくなってほしい、僕を好きになってほしい、ずっと一緒にいたい……

数分経ってから、勇樹が実波の肩をつかんだ。

出そう。……いい？」

大きな陰茎を咥えたまま、〇と答えて、実波は上下運動を続けた。

勇樹も自分で腰を数回動かした。低く唸って、実波の肩を持つ手に力が入った。

ビュツと温かいものが実波の口の中に広がった。喉を打つように何度も。

実波は勇樹の陰茎を咥えたまま、それが脈打ち終えるまで待った。

永遠に感じた。幸せだった。

少しして、勇樹の陰茎の先からすべて吸い出し、実波は口に含まれたものを迷わずすべて飲み込んだ。

部屋が静かになった。仰向けになり天井を見る。二人の呼吸だけが聞こえた。

勇樹が実波を引き寄せて抱きしめた。

全部飲んじゃったの？」

うん」

「ごめん。ありがとう」と勇樹が言った。嬉しそうな、少し申し訳なさそうな顔をしていた。

なぜ謝られて、お礼も言われているのかよくわからなかったが、実波は勇樹の胸に顔をうずめた。心臓の音が聞こえた。

数分後、実波はそのまま、親に抱かれた赤ん坊のように、勇樹の胸の中で安心感に包まれながら、スースー寝息をたてて眠った。

七

目が覚めたとき、実波はまだ勇樹の胸の中にいた。いつの間にか毛布が掛けられていた。

窓から朝の光が差し込んでいた。スズメは鳴いていない。

実波はしばらくの間、そのまま動かなかった。勇樹の寝息が聞こえた。まだ寝ているようだ。

目をつぶって昨夜のことを、順番に思い出す。

居酒屋で三時間話したこと。品川まで来たこと。ハグをされたこと。ママのことが
ばれたこと。それから、その後のこと。

顔が熱くなった。寝起きなのも相まって、陰部が昨夜みたいにまた固くなっていた。

実波は自分の顔を勇樹の胸にさらに深くうずめた。
起きたくなかった。ずっとここにいたかった。

少しして勇樹が起きた。

ん、おはよう」

低い声だった。寝起きの声だった。

おはようございます」

ちゃんと眠れた？」

はい。おかげさまで」

嘘ではなかった。久しぶりに、深く眠れた気がした。

ぞっか。よかったよかった」

勇樹が実波を抱きしめたまま頭をぼんぼんと叩いた。子供をあやすような叩き
方だった。実波はまた顔が熱くなるのを感じながら、それでも動かなかった。

腹減った」と勇樹が言った。

僕も」

何か食べたいものがある？」

なんでも」

どりあえずコンビニ行こうか」

はい」

そうは言ったものの、二人ともしばらく動かなかった。昨夜の余韻からどうしても
抜け出せなかった。

三十分後、コンビニで買ったおにぎりサンドイッチを、勇樹の部屋で並んで食べ
ていた。昨夜と同じように、話した。他愛ない話だった。

実波は、楽しいと感じていた。また、楽しいと感じていた。

また会える？」と勇樹が言った。

唐突だった。嫌なはずがなかった。

もちろん」と実波は答えた。

よかった」

勇樹は安心したように笑った。人を安心させる笑顔だった。初めて会ったとき、待ち合わせ場所で見たのと同じ笑顔だった。

帰りの電車の中で、実波はスマホを見ていた。勇樹からメッセージが来ていた。

昨日はありがとうございました。また連絡します！」

実波は少し迷ってから返した。

「ちーこそ。また会いましょう」

また、定型文みたいなメッセージを送信した。

窓の外を見た。

宵のはじめ。

昨日の夕方、勇樹に初めて会った瞬間を思い出した。そこから今に至るまでを頭の中で何度も何度も再生した。

また会いたい、と思った。スマホを閉じて、目を閉じた。

降りる駅まで、まだ少しかかる。